

V 第36回日本乳癌画像研究会開催に向けて

みんなで取り組む乳癌診療

当番世話人

松林(名本) 路花

国立病院機構九州医療センター乳癌センター /
超音波・生理検査センター

2027年2月13日(土)・14日(日)の2日間にわたり、福岡国際会議場にて第36回日本乳癌画像研究会学術総会を開催します(図1)。新型コロナウイルス感染症流行下での2021年大会を経て、6年ぶりに福岡においてリアル開催がかなうことは大変うれしかぎりです。本学会を日頃より支えていただいている多くの先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

大会テーマ「みんなで
取り組む乳癌診療」と、
多職種連携への思い

本大会のテーマは、「みんなで取り組む乳癌診療」です。患者さんやサバイバーの方々をはじめ、医療に携わる専門

職のほか、先進的技術を提供する、あるいは患者さんの日常を支える企業など、乳癌診療にかかわるあらゆる方々を「みんな」ととらえ、このテーマとしました。

本研究会は、画像のみに特化した「クローズドな一部の方のみが参加する会」という認識を持たれることが時々あるようですが、乳癌診療の出発点とも言える画像をハブとし、かかわる方々が自由に、多角的に考える場を想定し、今回のテーマを掲げました。

日進月歩である乳癌の治療において、医療者も、それに貢献できる最新の知識が必須です。一方、乳癌に罹患する方は社会や家庭の中心となる年代や若年の方も多いため、そういった社会的感情も含めた総合的な視点を考えるきっかけになればと考えております。

乳癌の診断・治療、その後の生活に至る patient journey 全体を視野に入れた時、患者さんを中心に据え、多様な関係者が連携する姿勢がこれまで以上に求められています。そこで本大会では、従来の枠を超え、多領域が交わる新たな試みを企画しました(表1)。

過去にない試み：社会
全体で支える特別企画

本大会の一つの目玉として、特別企画「『みんな!』で考えよう、乳癌画像診断。」を企画しております。医療者だけではとらえきれない視点や社会の側の課題を共有するため、行政の立場から厚生労働省医政局長の森光敬子氏、サバ

イバーおよび patient journey の観点から認定NPO法人ささえあい医療人権センター COML 理事長の山口育子氏をお招きします。さらに、企業としての立場から、GEヘルスケア・ジャパンの岩崎真梨子氏、医療者として乳腺外科医の岩熊伸高先生(九州医療センターがん診療統括部・乳腺センター)、放射線診断医の久保田一徳先生(獨協医科大学埼玉医療センター放射線科)にご登壇いただきます。患者さん、行政、医療者のほか、先進機器を届ける企業からの視点も含め、「乳癌診療を社会全体で支える」ための議論を深めたいと考えております。

実践と体験を重視した
オリジナル企画の数々

最新の技術革新を日常診療にどう落とし込むかを探るため、実践的なオリジナル企画を多数用意しました。

特に注目していただきたいのが、プログラムの中に時間を確保し開催される「Breast Care Technology Showcase」や、「AI Hands-on Lab」といった新しい試みです。

これらは、世話人と実行委員長が案内役として各ブースを回り、各企業から最もアピールしたい点をプレゼンテーションしていただきながら、実機を体験します。画像診断・患者さんの生活を支える最新機器や人工知能(AI)技術の進化を肌で感じられる体験型の場を提供します(図2)。



図1 第36回日本乳癌画像研究会 ポスター
(原画：筆者)